2012.01.28 神前遺跡現地説明会資料

神前遺跡現地説明会

－和歌山橋本線道路改良工事に伴う第３次発掘調査－

鎌倉時代の「宮井用水」を発見

公益財団法人和歌山県文化財センター
和歌山市湊 571 番地１
TEL：073－433－3843
FAX：073－425－4595

神前遺跡発掘調査事務所
和歌山市神前 遺跡調査地
TEL/FAX:073－471－6741

１．はじめに

公益財団法人和歌山県文化財センターでは、平成 21 年度より和歌山橋本線道路改良工事に伴い神前遺跡を調査しています。今回の調査では、約 2000 ㎡の調査を行っており、弥生時代の水路とみられる溝と素掘井戸、古墳時代の竪穴建物・掘立柱建物、鎌倉時代の水路と考えられる大溝等を発見しました。中でも、鎌倉時代の水路と考えられる大溝は、安原盆地の開発に伴い開削された宮井用水の可能性があり、重要な成果となりました。

２．弥生時代の水路・古墳時代の集落

弥生時代では、水路とみられる溝８条を発見しています。溝１～７は、いずれも北東方向から南西方向へと同じ方向に流れる溝で、いずれの時期も弥生時代前期から中期（約 2400 年前～ 2200 年前）のものです。これまでの調査においても同様の溝を 10 条程度検出しており、今回の調査で検出した溝を合わせて 16 条以上もの溝が流れていたと考えられます。現在の調査区より北側では、大規模な谷状地形から、多数の溝が南方向に向かって分岐する状況が確認されていることから、これらの溝は全長 300m以上の水路であったと考えられます。弥生時代において、これほど多数の水路が見つかった例は珍しく、農耕稲作の開始に際して、灌漑用水の整備が重視されたことをうかがい知ることができます。

３．鎌倉時代の水路と考えられる大溝

鎌倉時代の遺構としては、水路と考えられる大溝を発見しました。大溝は、調査区を縦断する現在の用水路に沿って、用水路の両側、幅約１ｍの範囲で溝の両端を検出しています。検出した大溝の全長は約 70m以上で、さらに南方へと続いていくようです。この大溝の中央部分は現在の用水路が流れることから、大部分は不明ですが、溝の埋土の状況と、溝から出土した遺物の時期から、両側の溝の肩部は同一遺構のものと考えてもよく、幅約６ｍの大溝に復元できます。溝からは、平安時代末から鎌倉時代（今から 900 ～ 700 年前）の土器が出土しており、この大溝が少なくとも鎌倉時代のものと考えられます。

今回検出した鎌倉時代の大溝は、調査区を流れる現在の用水路と同じ方向で流れることから、現在の用水路である宮井用水との関連性が非常に高いと考えられます。宮井用水とは、紀ノ川から取水した用水を、音浦分水工で太田水路・中溝水路・新溝水路に３分し、和歌山平野一帯及び、安原盆地を灌漑する用水路です。

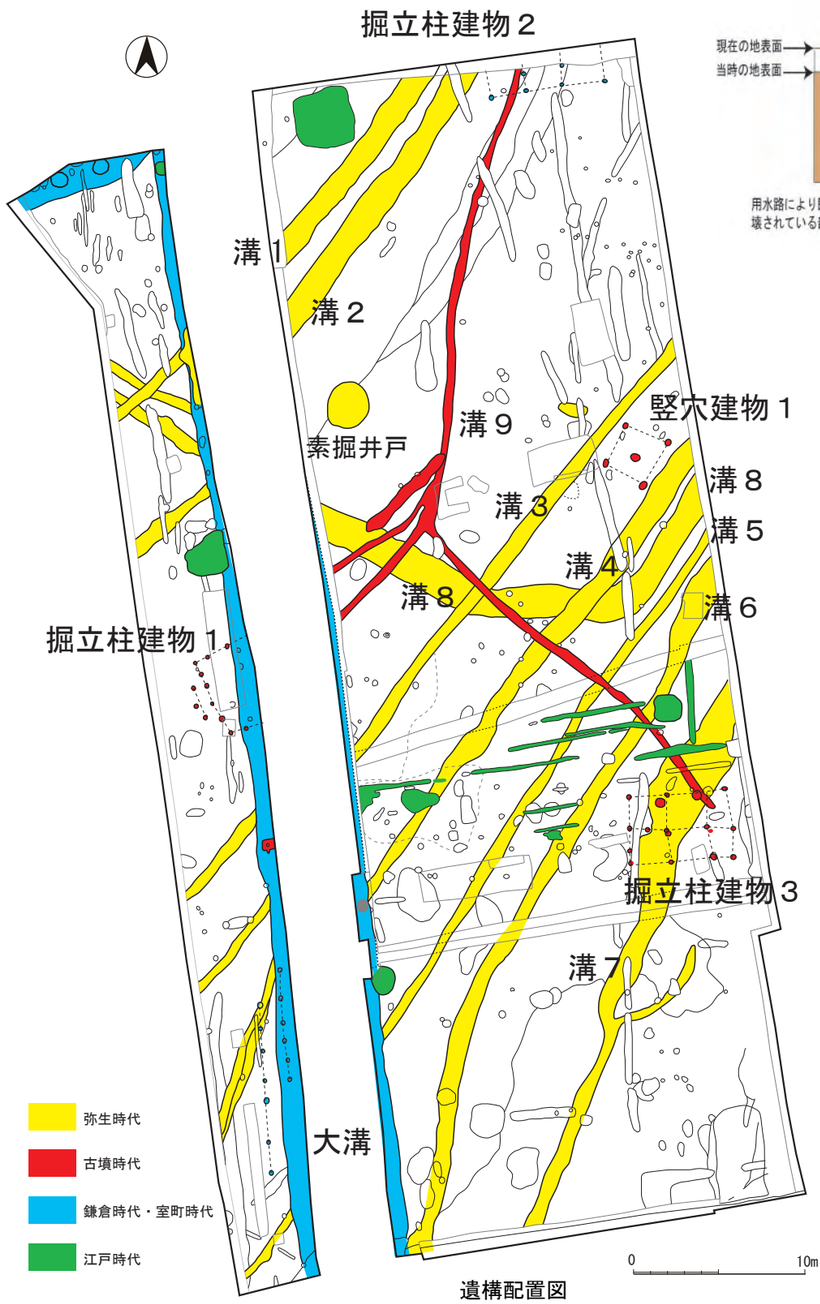
調査位置図

この現在の用水路は、宮井用水中溝水路とよばれ、津秦・神前・井辺地区、さらに南流し、和田川の河床に埋設されたフキビ（吹樋）を通り、安原盆地を灌漑する用水路です。今回発見した鎌倉時代の大溝は、現在の用水路と同じ位置に築かれており、幅約６ｍという規模から考えて、鎌倉時代の宮井用水であった可能性があります。また、他の溝とは異なり、この大溝は、地形に逆らいほぼ北から南へと流れることから、南側へと水を流す目的があったと考えられます。このことから、今回検出した鎌倉時代の大溝は、安原盆地へ水を流す水路であった可能性があります。鎌倉時代の永仁三年（1195）に行われた永仁の大検注の検取帳によると、調査地周辺及び現在の和田には、「壟溝」「畔溝」「溝」「新堀」及び「和田溝」の記述があり、安原盆地へ流れる用水路の存在がこの頃から存在していたことが文献資料からも裏付けられます。

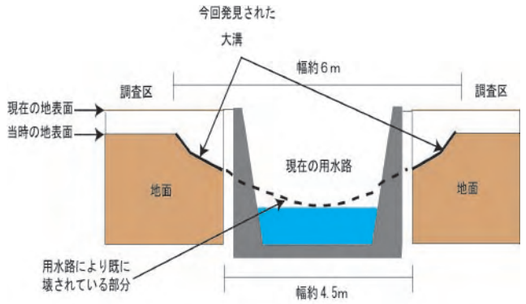
さらに、鎌倉時代に大溝について興味深い事実として、平安時代末期に安原盆地の開発が行われたことが挙げられます。大治二年（1127）、それまで和田川を逆流する海水による塩害により「塩入荒野」とされていた安原盆地が開発され可耕地となったことが、文献により明らかにされており、今回発見した水路とみられる大溝は、平安時代末期の安原盆地の開発に伴い開削された用水路と考えてよいと思われます。

また、周辺には河南条里と呼ばれる古代の土地区割りが残っており、今回発見した鎌倉時代の大溝もこの条里と同じ方向を示すことから、この河南条里の成立年代が少なくとも鎌倉時代までさかのぼることがわかりました。

今回の調査成果では、中世の宮井用水だけではなく、日前宮領の成立に関係する大治の開発の実態と、河南条里の成立時期について考えるうえで大きな成果となりました。



遺構配置図



鎌倉時代の大溝模式図

弥生時代の溝

弥生時代の素掘井戸

鎌倉時代の大溝